

明治日本における女子教育とキリスト教

教育の試みの一例：女子学院の歩み

山田美穂子

はじめに

このたび青山学院女子短期大学65年史を編纂するにあたり、筆者は戦後の本学が歩んだ65年のうち「宗教教育」の面を概観する章を担当することになった。この場合の宗教教育とは言うまでもなくキリスト教教育を指している。明治期にアメリカからの宣教師により開学された主に英語を教えるための私塾はやがて、現在はキリスト教主義学校と呼ばれるようになったいわゆる「ミッション（宣教）・スクール」へと発展し、日本の女子教育の先駆けとなった。明治期に米国長老派教会の女性宣教師によって開かれ現在では中等・高等部教育のみを行っている女子学院はそのもっとも早い例のひとつであり、それゆえ同じく明治期に米国のメソジスト教会の女性宣教師によって開かれた本学との比較対象として、その歴史を再確認することには意味があると思われる。本稿では『女子学院の歴史』、『五十年史』『八十年史』や『同窓誌』などの資料をもとに編まれた同窓会創立100年記念事業の出版物『まことの人の輝きを』を基底に、時代が要請する西洋化の恩恵と矛盾を引きうけて女子専門高等教育を目指した、先進的な私設教育機関におけるキリスト教教育のありかたと変遷を時代順に概観し、とくに明治期から大正年間にかけての日本の女子教育とキリスト教教育との関わりに注目したい。

1. 女子教育の曙 「女子学院」になるまで 1870-1890

米国長老派教会宣教師カロゾルス夫妻が他の宣教師たちとともに横浜に到着したのは1869（明治2）年、いまだキリスト教禁教下であった当時の日本では外国人は築地や横浜の外国人居留地区で厳しい監視のもとにおかれていた。翌年1870年にミセス・カロゾルスは築地A六番地に英語を教えるための私塾—通称A六番女学校—を開いた。これが女子学院の源である（『まことの人の輝きを』、24）。同年、ミス・キダが横浜にキダ女学校を開き、これが現在のフェリス女学院の始まりとなる。女子学院はフェリスとともに日本の女子教育の先駆けとなった。ちなみに本学の源流である「女子小学校」もその四年後の1874（明治7）年に、米国メソジスト監督教会の派遣した婦人宣教師ドーラ・スクーンメイカーにより創設されている。その前年1873（明治6）年に「切支丹宗門」（＝キリスト教）禁制の

令が解除されたことが、海外の宣教師団伝道局（ミッション）の活発な活動のきっかけであったことは想像に難くない。たとえばカナダ・メソジスト教会は初めての外国伝道地に日本を選んだ。そのカナダ・メソジスト教会婦人伝道会社に基盤をおいて「東洋英和女学校」が1884（明治17）年に開校されている。こうして、宣教師たちは英語の教授と布教活動とをセットにして各地に学校を開いてゆく。少し話をもどすと、1873年の末には米国宣教師会の重要人物であったヘボンとともに来日したミス・ヤングマンとミス・パークが、築地六番地内に通称B六番女学校を設立した。

1876（明治9）年、B六番女学校は築地居留地新栄四十二番地に新築移転し「新栄（しんさかえ）女学校」となった。一方、A六番女学校が閉校になったことを惜しんだ原胤昭は銀座で営んでいたキリスト教図書出版販売の十字屋を転化して「原女学校」を設立し、横浜から宣教師ミセス・ツルーを招く。この「原女学校」は場所の利点もあり、当時においては教育面・伝道面の双方でもっともレベルの高い学校と注目を浴びていたが、経営の行き詰まりから二年後に四十二番地の新栄女学校に合併された。この原女学校の開校の三ヵ月後、櫻井ちかによって英女学（英語と女子教育、の意）家塾「櫻井女学校」が開校される。これが女子学院のもう一つの源流である。この塾舎は現在の女子学院に近い麴町中六番町一番地にあり、「八畳二間と玄関と女中部屋つきの日本家屋、ミッションからの資金的援助を受けない、キリスト者の手による日本人経営の学校」（『まことの人の輝きを』、26）であったという。築地の「新栄女学校」と麴町の「櫻井女学校」は紆余曲折を経て明治23年に合併し「女子学院」となる。この二つの前身校の特徴的エピソードを簡単にまとめる。

1876（明治9）年に発足した「新栄女学校」は責任者の名前をとって「ヤングマンの女学校」などと呼ばれていたが、宣教師会伝道局に届け出のあった正式名称は資金提供者の名前にちなんで「グラハム・セミナリ」であった。しかし現在のミッション・スクールの存在にあまりに慣れたわれわれが忘れがちな点は、当時の伝道局（ミッション）本部の意向は「教育したいのは男子であって女子ではない」というものであった、という歴史的な事実である。日本で女子教育を広めたいという現場の意見はともすれば本部との葛藤を生み、資金的苦境に立たされたヤングマンであったが、その逆境にもめげず1877（明治10）年には明治政府で活躍した元幕臣の娘や、児童文学の先駆者である三浦りうら有力者・知識人を含む生徒十名によるキリスト者の会「好善社」を発足させた。この「好善社」は翌明治11年には東京の五ヶ所に日曜学校を、また貧しい家の子女のために「啓蒙学校」を開いた。またヤングマンは新栄女学校を辞任したのち目黒にハンセン氏病患者救済事業のための「慰廃園」を設立し、今日まで日本のみならずアジア各国での活動を行っている。一女生徒の教育資金のために生徒の手作りの品の販売や著名人の演説や祈禱を行う「目づらしい催し」（『読売新聞』1877年12月19日）が開催されたのもヤングマンの女学校であり、これは日本最初の奉仕活動としてのバザーであった。

1878（明治11）年、ヤングマンは伝道に専念するため女子伝道学校を始め、ミッション

本部の信篤いミセス・ツルーが経営責任者となる。ツルーの信念は「日本人の教育は日本人の手で」というものであったため、自ら校長になることはなかった。のちに北海道にミス女学校を設立したミス・スミスら外国人教師のほか、女子学院となってからの初代院長で日本矯風会の設立者である矢嶋楯子、女子美術学校を設立した横井玉子、仏教の学僧高津柏樹など多彩な分野の人物を招く。その結果1885（明治18）年の募集広告には「外国助教師四名、本邦教師数名により、彼の長をとり我が短を捨て和漢英和の学術は勿論諸礼裁縫割烹に至るまで専ら注意して適世の教育を施すにあり」（28）と内容の充実をアピールするにいたった。この文言の中核は「適世の教育」であり、ここにはすでに単に道德観を律するキリスト教教育を施すにとどまらない、現実社会の諸問題を意識にのぼらせつつ現実的な技能をもって社会に適応する実用性を具えた女性を育てる、という強靱な目的意識がうかがえる。

東京府によって認可された日本初の日本人経営による女学の教育機関、櫻井女学校の創立者については簡単な説明が必要であろう。櫻井ちかは日本橋の裕福な御用商人の家の長女に生まれたが、幕府の倒壊によって家は没落し不遇な少女時代であったという。1872（明治5）年、18歳で愛媛県の神官の息子であった海軍士官と結婚、1876（明治9）年に宣教師タムソンより受洗し一致教会教師として伝道活動を始めた。夫が航海で留守の間、神田に開設されていた芳英女塾（最古の日本人経営の女塾）に入学し、教師としての訓練を積んだのち、1876（明治9）年に東京府に英女学家塾開業願を提出して認可され、櫻井女塾が誕生した。この学校のカリキュラムは英語を中心に地理学、歴史、数学、化学、生理学、修身学などに加え、「ハウスホールドマネージメント」のことが見えるのが特徴的である。当時のアメリカの家政学の成果をとりいれ、育児、家庭経済、裁縫などの科目をおき、家政学を重視していることがうかがえる（『まことの人の輝きを』、33）。

この女学校とて創成期には資金難と人材不足、周囲の理解の欠如などに苦しむことは例外ではない。一時は自分と夫と近所の漢学の先生とで、全教科を教えていたようなありさまであった。しかし「一人の外邦の友人ありて我が志を知り、大いに助力せられしが故に（……）事業を拡張しかつ少しく閑暇を得ることとなりしにより外に交際を求めて志を広く発表することを得たり」（『女学雑誌』317号、明治二五年五月）。この外邦の友人とは米国長老派教会の伝道会社員ストワード夫人であり、夫を受洗させた宣教師タムソンの斡旋によりミッションからの援助、として明治12年から毎月二十五円を寄付してくれることが決まったのである。これを受けて校名を正式に「櫻井女学校」とし、高等小学校を増設、教員として東京女子師範学校の卒業生や茨城師範卒のちに大阪梅花女学校の学監となる浅井柞（さく）を採用、教員の質は飛躍的にあがった。また学齢期前の者も入校させる、有志の婦女を教育するための公開講座を設置し、西洋料理を学びながら婦人が会食を通じて交際する場を作り出すなど、きわめて現代的なセンスと経営手腕を発揮している。この延長として1879（明治12）年4月、ちかは東京府から櫻井女学校付属幼稚園の開業の認可を受け、私立で、日本初の幼稚園を開いた。

1880 (明治13) 年当時の櫻井女学校の状況は、学齢 (6~13歳) とその前後の年齢の生徒を合せて65名 (うち男子11名)、教員は櫻井ちかの他に日本人4名、外国人1名という構成であった。こうしてミッションからの援助を得て櫻井女学校は幼稚園から小学校、高等科をもつ一貫教育の機関となり、また長老派教会の強い影響下におかれることとなる (『まことの人の輝きを』、36)。翌明治14年、櫻井女学校はミッションからの資金で麴町中町六番町二十八番へ新築移転、ちかは辞任して心機一転、夫妻で北海道に渡り、内村鑑三らと親交を持ち伝道活動に入る。

こうして幼稚園から高等科までをそなえた櫻井女学校は教育機関として新たな局面を迎えたといえるだろう。『女子学院五十年史』の編者田村直臣は次のように総括している。

明治十三年櫻井女学校がヒラデルヒヤ婦人伝道局の配下に移るや、中六番町二十八番地に地をばくし、四千圓の大金を投じ立派なる校舎を建築し、矢嶋楯子女史を校長となし、ツルー夫人はミス・デビスを伴ひ来り女子教育の舞台に於ける大役を務められた。(……) / 櫻井女学校は教育界に断然頭角を顕わし、その十年間の歴史は女子教育のみならず、多方面に亘って日本文明の基礎ともなるべき要素を社会に貢献した。その働きを見ると大体次の様に分けられる。

- (一) 明治十六年幼稚園を拡張せんとして、三番町五十二番に分校を開き、米国よりこの道に有能なるミス・ミリケンを招き其の任にあたらしめた。
- (二) 資金なき女学生に高等なる教育を受けんと欲し、淀橋角筈に三千坪の地を求め、加藤とし子女史を校長とし、多数の女子に獨立の精神を與へる為め女子獨立学校なるものをたてた。
- (三) 分校に於いて年長者の婦人の為めに英語科を設け、当時有名なる人々の妻君等に英語を教へた。
- (四) 地方の女子教育に着眼し、新潟県高田及び栃木県宇都宮に櫻井女学校の分校の如きものを開き、櫻井女学校の卒業生をしてその任にたらしめた。
- (五) 三番町にサマリタン會なるものを設立し、貧民の施療に従事した。
- (六) 校内に看護婦養成所なるものを設立し、ミス・ライトを米國より招き、日本最初の看護婦学校の基礎を置くに至った。

一面から見れば櫻井女学校は総合大学の觀があった。当時の人々の注意の的となったのは故あることである。

(『女子学院五十年史及学窓回想録』(昭和三年) より)

田村がまとめてみせた櫻井女学校の新機軸はいずれも当時としては画期的なものである。(一) は保母養成課程の「幼児保育科」のことで、日本最初のキリスト教保育の場である。ここから日本の幼児教育のさきがけとなった人物が輩出された。(二) はミセス・ツルーの発議で設けられた職業学校 (別科) がのちに独立したもので、女子が社会的に一

個の独立した人格となることを目指す教育の場として注目を集めた。一時は内村鑑三が校長をつとめ、1900（明治33）年には「角筈高等女学校」となりさらに「精華高等女学校」に発展する。（四）の高田、宇都宮の女学校はやがて廃校になったが、ミセス・ツルーが前橋に開校した「共愛女学校」は現在も存続している。（六）は日本の看護学校の先駆けであるといえよう。またミセス・ツルーは当時日本にはなかった、婦人が病気の前後に休養できる保養施設「衛生園」を計画し、教え子でアメリカで医学博士の学位をとって帰った岡見京の協力を得て角筈（現在の西新宿周辺）に開園していた。「看護養成所」はその角筈に移転し、キリスト教精神に基づいた人格・見識・学力の優れた看護婦を育てた。そのなかにはさらに帝国大学で看護学の実践を学び、日本の看護婦の先駆的指導者となって活躍した大関ちか子も含まれている。

この時期、校長は矢嶋楯子であったが、その背後の精神的支柱はミセス・ツルーであった。その冷静沈着にして温厚、控えめな人柄が内外の人脈を結びつけ、明治大正期の日本人キリスト教指導者からの信が篤かったようである。ツルー自身のことばの記録は少ないが、わずかに残る講演の記録には「今の時勢にては婦人が活発の気象を修めるのは必要であります。我が愛する姉妹方よ、精神をよく磨き、真に高尚なる志をお立てなさい。メレーライオンが申したように、己の努めを怠り己のなすべきことをしないで、日を送るのを大なる苦痛とするような婦人を模範としなさい」との、ある意味では類型的な、良心的で情熱あふれる宣教師のことばがある（『まことの人の輝きを』43、「善良なる模範の価値」、一八八七（明治二〇）年八月 女学雑誌社主催第二回女学講演会）。

先に引用している『女学雑誌』によれば、櫻井女学校は新栄女学校と気脈を通じ、その構内に新しい高等科を設けた（76号、明治二〇年）。これが日本最初的女子高等教育の場であった。また明治21年には英語に加えてドイツ語科も設置したとある（134号）。同じ『女学雑誌』の調べによれば、明治21年11月の時点で櫻井女学校の教員数は24、生徒数は325と群を抜いている。次点は生徒数254の共立女子職業学校、新栄女学校は生徒数135である（「京浜間における女学校の現況」、『女子学院の歴史』、186）。こうして櫻井女学校は京浜間において、幼児教育から女子高等教育までを行う最大の学校となり、新栄女学校との提携を強めていった。

2. 「女子学院」の誕生 1890—1913

1890（明治23）年、「櫻井女学校」と「新栄女学校」は合併し「女子学院」という名称になった。この名称は二校が対等であれという宣教師会議の願いを基に決められたらしいが、一方で当時においては最高の女子教育機関を目指すという意気込みがこめられていると『まことの人の輝きを』の編者は述べている（46）。初代院長は矢嶋楯子で、その言葉「あなた方は聖書を持っています。だから自分で自分を修めなさい」が唯一の規則として生徒による自治を認めていた。その前年1889年には憲法が發布され、1890年には第一回帝国議

会が開会した。第一回議会の議員には女子学院と縁の深い、次のようなキリスト者議員が含まれている一島田三郎（矢嶋楫子の協力者、廃娼運動に尽力した）、中島信行（自由民権運動家、夫人は新栄女学校で教鞭をとった婦人民権運動家の中島湘煙）、加藤勝弥（ミセス・ツルーが始めた女子独立学校の後継者）、湯浅治郎（夫人は矢嶋楫子の姪の初子、旧姓徳富）。こうして出発した女子学院は前身である二校の個性を生かしつつ新しい校風を作り上げてゆく。1894年に入学したある生徒は次のように述べている。

西洋の方々も、その頃の他のミッション・スクールで見聞するように、習慣の異なる西洋流儀を押し売りすることなく……自由寛大の風をもってそのうちに自ずから整うて行くようになさいました。……日本の女性らしい自然の特徴を、銘々に發揮させて、人物を造るを本位とせられたと同時に、独立自尊の気象を重んじ、西洋風の善いところを学ばせてくださいました。

（『女子学院五十年史』より）

しかしながら、「女に高等教育はいらない」という当時の日本社会の空気の中で、「女子学院のようところで学ぶのは、本人にとっても、送り出す家族にとっても並大抵のことではなかった」（『まことの人の輝きを』48）。ある金沢出身の卒業生（1895年卒）は「当時殊に地方の人々には、娘に学問させるさえ異様に思われ、ましてやキリスト教の学校に入れるということは、気違いの沙汰と思ったでしょう。さればこそこでもまた、親と娘は先駆者の苦難に耐えねばなりませんでした」と述べている。こうして世間からの偏見や批判の目にさらされながら学ぶ生徒たちの勉学の意欲はいっそう強固になったと思われる。1895年に入学し、後に矢嶋の意志を継いで矯風会会頭となり廃娼運動に尽くした久布白（大久保）落実は次のように回想している。

七年間の女子学院生活をふりかえって、取り除け難い印象は少なくない。学問の上からいえば、鍛え上げたという感じだ。そう広くわたったとも思えないが、とにかく何年の間、連続して二時間乃至五時間位の自習が自得するまでくりかえされた。学問が慰みでない事実、勉め励むということは上級生から下級生まで徹底するまで分っていた。

（『女子学院五十年史』より）

こうした先鋭的な女子教育を遂行していた教職員に目を向けてみよう。1899年6月の『風俗画報』は臨時増刊号で東京の新しい名所として女子学院を詳しく紹介している。

この時期の重要な出来事として、1899（明治32）年の文部省による訓令第十二号の発布があった。次のような法令である。

「一般の教育をして宗教の外に特立せしむる学政上最必要とす。依て官公立学校及学科課程に関し法令の規定ある学校に於いては課程外たりとも宗教上の教育を施し又は宗教上の儀式を行うことを許さざるべし。」

この訓令が当時のキリスト教教育を行う諸学校に大きな影響を及ぼしたことはよく知られている。麻布中学はキリスト教教育を断念し、明治学院は尋常中学校の資格を返上した。女子学院はこのとき各種学校であったためキリスト教教育を続けることも出来たが、付属の櫻井小学校は義務教育機関であったため訓令を順守せねばならない。矢嶋はこの国家政策に怒りを表明、創立の精神に反するとして9月に廃業届を出し廃校を決めた。

このような創成期にまつわる困難はあったものの、米国宣教師会の伝道の成果という観点からみれば女子学院はひとつの大きな達成の象徴的存在となっていたと考えてよい。米国長老教会宣教師インブリーは30年間の日本伝道の経験をふまえ、1905年に母国アメリカで「日本における教会の成立と形成」という講演を行い、日本におけるキリスト教教育の大きな成果として女子学院を紹介している。その要約の後半部をここに引用し紹介したい（『まことの人の輝きを』、60-61）。

……この学校の伝統や精神は、キリスト教的にも知性面でも著しく程度の高いもので、期待通りの学校生活を送ることができます。そしてこの学校は、単なる学校以上のものに到達しています。というのは、この学校はキリスト教の働きのセンターになっているからです。卒業すると多くの女性たちは、しばらくキリスト教主義の学校で教鞭を取るか、キリスト教関係の仕事をしている女性の助手になります。それから当然のことながら結婚します。殆ど例外なく、彼女らは学校との連絡をとり続け、今度はその娘たちを女子学院に送っています。卒業生の非常に多くの者が、妻となり母となってもクリスチャンとして生活をしていますし、教会の内外でキリスト教のために大きな力となっています。このことを知ることは教師たちにとって言い知れぬ慰めとなります。このようにして、日本キリスト教会設立のための一つの器として、この学校の真価を強調することは、どんなに強調してもしすぎることはありません。その影響力の広さにはしばしば新鮮な驚きを覚えます。

（下線は筆者による）

（W・M・インブリー、日本キリスト教会歴史編纂委員訳『日本伝道事始め』）

この一文を、その直前に述べた訓令第十二号への各キリスト教主義学校の反応と併せて読むとき、ここに凝縮された当時の北米キリスト教界の思惑と近代化すなわち西洋化を急ぐ当時の日本の国家的要請との見事な合致に、あらためて思いを巡らさざるを得ない。国家主義的な教育理念を掲げた明治政府は当然キリスト教主義の学校の隆盛を恐れて、これ

を妨害するような訓令を発令した。しかし皮肉なことにミッション・スクールが日本の女子にたいして施そうとした教育は、近代化を急ぐ政府の国家主義的理念と利害の一致する点があった。十九世紀イギリスに端を発した西洋的な良妻賢母思想と、合理的な家事や育児の技能は、妻の地位を道徳的かつ有能な家庭内のリーダーとして確立させ、また政府が唱える帝国臣民の健康増進とも一致したのである。近年、心理学者の小倉千加子は東洋英和女学校出身の村岡花子が宣教師から譲られた『赤毛のアン』の翻訳を通して日本の精神風土を変容させたことを説明する際に、この一見矛盾と見える明治期のキリスト教教育と女子教育の隆盛に触れて「政府はミッション・スクールの宗教教育に対してさまざまな制約を加えてこれを阻止していたにもかかわらず、当の政府高官は自分たちの子女をすすんでミッション・スクールに通わせていた。親たちが学校に期待したのは、英語教育と欧米的生活の習得であった。外国人との社交の場で英語を駆使できる卒業生たちは、家庭と社会活動において政府の指導する欧化主義の先頭に立って、活躍してくれる」からだと言っている（小倉、317）。先に見た通り、第一回帝国議会の議員の夫人に女子学院関係者や卒業生が多いこと、また訓令第十二号には激しく反発した初代院長矢嶋でさえ当時の臣民の習いとして、女学（女子教育）の向上は国家への忠誠心と考えていたという事実がその指摘を裏づけている。その例証として、矢嶋が女学の向上は皇后のお陰だと感謝し、その謝意を表すために全国の女学校に先駆けて皇后誕生日を「持久節」として学校行事に組み入れたことが挙げられよう（『女子学院の歴史』、319、『まことの人の輝きを』、56）。

宣教師インブリーがアメリカで上記の講演をしていたころ、日本社会は大きな転換期にあった。日露戦争後の日本では戦勝のおごりとポーツマス条約への不満から外国人やミッション・スクールが暴徒の標的となり、女子学院も焼き討ちの恐喝を受ける一件もあったのである。それだけではなく、高等教育を受け時代の刺激により覚醒した知識人たちを中心に社会問題への関心が高まり、社会主義も復活、個人主義への傾倒が一種の流行となった感があった。「信仰による自由、自立の志とともに「社会の器」となる使命感を育てた」（『まことの人の輝きを』、74）女子学院はこうした社会の風潮の変化を如実に示す風向計のような性質を持つ。『日刊平民新聞』（四一号、明治四〇年三月六日）には「麹町なる女子学院では社会主義を信じる生徒十名以上発生し…」との記事が見えるとの記録がある（同、74）。また明治末期から大正にかけて女子学院は中国、韓国からの多くの留学生を受け入れ、その中から韓国独立運動の指導者となる金マリアも出ている。

3. 女子学院の転換期 1913—1927

女子学院にとって次の大きな転機は1910（明治43）年に起こった。その後のキリスト教伝道に大きな影響力を与えたエディンバラ世界宣教会議は1910年、東洋におけるキリスト教主義女子高等教育の育成助力を決議、翌年にはそのための調査研究委員会を発足させた。この調査委員会はフェリスからの委員長と女子学院その他の学校から出た宣教師7名

で構成され、次の三点を関係のあるキリスト教系女学校に諮問した。

- 「一、ミッションの協力によって、日本にキリスト教主義の女子高等教育機関を設けることに賛成か。」
- 「二、キリスト教主義女子教育事業を凡て包括する連合組織の企画に協力するか。」
- 「三、右二ヶ条に賛成ならば委員の候補者を選出されたい。なお全委員は二十五名である。」

女子学院は一、二条に賛成し、委員候補者として前年にオックスフォードでの勉学を終えて帰国していた学監の三谷民子を選出した。二十五名中日本人委員は九名、そのうち女性委員は四名であった。すなわち、のちの東京女子大学長・安井哲、津田英学塾校長の津田梅子、女子高等師範教授でのちの家政学院学長・宮川（大江）すみ、そして三谷民子である。三谷はこの後「無教派連合女子大学構想」を主張する委員会の一員となり、東京女子大設置に協力することになった。

1913（大正2）年夏、米国長老派の在日宣教師団は女子学院の将来的な組織体制を整えようと理事会の設置を決定。理事には宣教師とともに同窓会選出の卒業生も加えられ、同窓会はミッションボードとともに学校運営に責任を負う形となった。その会議では矢嶋楯子の院長辞任が承認され、院長の後任に三谷民子を選んだ（『まことの人の輝きを』、77）が、それが意外な形で社会に波紋を広げる。

この諮問が当時のキリスト教主義の女学校に問いかけた真意はなんであったか、という点を明らかにしないで進むならば、この後の矢嶋院長の更迭（と世間は見なした）問題はよく理解できないだろう。Ⅱの章の冒頭で、櫻井女学校と新栄女学校の併合直後の新生女子学院の気風を当時の生徒の回想を通して表現しているが、そこには「（……）その頃の他のミッション・スクールで見聞するように、習慣の異なる西洋流儀を押し売りすることなく……自由寛大の風をもってそのうちに自ずから整うて行くようになさいました。……日本の女性らしい自然の特徴を、銘々に発揮させて、人物を造るを本位とせられたと同時に、独立自尊の氣象を重んじ、西洋風の善いところを学ばせてくださいました」とある。この言葉の裏には、女子学院以外のキリスト教主義学校では宗教教育がより熱心に（露骨に）行われていたことが暗示されている。日本の下町の商家に生まれ、融通の利く現実主義者でもあり、親分と呼ばれるような人物の妻や社会的に忌避されていた娼婦たちとも違和感なく付き合う才覚のあった、キリスト者としては特異な人物であった矢嶋楯子が院長であったからこそ、ここまで無認可の一私塾として自由なキリスト教教育を施し、かつ女性の自立を促す高等教育の場として存続して来られたと考えてよい。そこに降ってきたこの諮問は、はっきりと女子学院が米国宣教師会伝道局の配下に入り、キリスト教の伝道のための女子教育機関への改組を受け入れるか、という一種の踏み絵であった。

また同窓会の学校運営への参加による学校組織の整備は政府の発令した高等女学校令に

よる認可を意識したもので、やがて女子専門学校入学資格の取得を目指して教育勅語の暗証訓練なども生徒に課すようになった女子学院は、一度の不合格を経て1915（大正4）年に無事その資格試験に合格する。こうして規模を拡大してゆく女子学院の動向には追従できないとして、矢嶋はあっさりと辞意を表明、それを宣教師会議も慰留することもなく受理したために、世間ではミッションボードによる院長更迭と騒がれたのであった。1913（大正2）年10月、夏休み明けの急報に呆然とする生徒・関係者に次のような言葉を送り矢嶋は辞任する。

（……）年々歳々、社会の教育進歩につれて種々の改革がある毎に、六ヶ敷い（むつかしい）問題も続々と出て来ましたがともかく宗教主義で押し通し今日まで認可学校にもしないで続けることが出来たのであります。文部省のが何も不利益と申すではありませんがいくら小さい日本でも果てから果てまですべての学校がどれも同じ様では利益でないと思って今日までこうやっておったのであります。

さて私の望みは今や私の思うところまで達せられました。もしこれ以上規模を大きくする場合においては私はその掌に当る器ではないと思います。（……）この意を察してご親切にもミッションからは私への永年の功勞に対して厚い謝辞があり、（……）加之（しかのみならず）貴重なる称号をも送るとのことであったが、難しい覚えられない名前を戴くのは苦痛でありますから失礼ながらそれはお返しいたしました。（……）

今責任を免れたからと申して決してこれぎり皆様とお別れするのではありませんので、未熟な考えなど起こさずによく勉強なすってください。（……）

（『同窓誌大正二年度』より）

ここで未熟な考えなど起こさず、と言っているのはこの前月、9月の東京朝日新聞の署名入り記事が巻き起こした新聞沙汰事件のことである。この記事を書いたのはその二年前に女子学院の職を去り東京朝日新聞女性第一号の記者となった竹中繁（1895年卒）で、矢嶋の院長引退について「ミッションの仕打ちとこれに関連した一切の無礼な行為を糺したい」という憤激もあらわな内容が少なからぬ波紋を巻き起こした（『まことの人の輝きを』、80）。結局、この経緯は、女子学院は創立当初からミッション経営の学校であること、当時のキリスト教主義女子教育の動向の変化、その変化にはついていけないと矢嶋自身が辞意をもらしていたこと、などからミッション側には非がないと同窓会の編者は結論づけている。ただし、女子大化をにらんだ組織の拡充を急ぐミッションのやり方が、創成期からの苦難を記憶する同窓生や学校関係者の心情を逆なでしたことは否めない。こうしてミッションへの反感のうずまく中、矢嶋は女子学院院長を辞任し、後任には宣教師のミス・ホルセーが就いた。

女子学院をより高度な女子教育機関へ生まれ変わらせたい、という動きは、これもまた社会の動向と連動している。1912（大正元）年以来、政府を指導してきた閥族勢力に対する民衆の反感が高まり、この年の12月には憲政擁護運動が起こり閥族の桂内閣を倒すという快挙を成し遂げた。思想、文学、演劇界にも自由思想が燃えひろがり、イプセンの『人形の家』が人気を博し、平塚らいてうらが『青鞥』を発刊して女性の自我の確立と婦人解放を提唱した。女子学院もこのような思潮に呼応するかのように、第一次大戦の勃発した1914（大正3）年の9月、大正デモクラシーの論客である吉野作造を講演に招いている（『同窓誌大正三年度』）。

1918（大正7）年4月、東京女子大学が開校したが、これは先に三谷民子を紹介した部分で述べた「無教派連合女子大学構想」がようやく実った結果であり、初代学長は新渡戸稲造、学監はのちに学長となる安井哲である。敷地はかつて看護婦養成所のあった角筈で、最初の理事には女子学院長ミス・ホルセー、次の院長となるA・K・ライシャワー、女子学院教師の井深花の名がみえる。女子学院は、当時の主だった女子ミッション・スクール、青山女学院、東洋英和女学校、フェリス女学院とともに高等科を廃止し、高等科進学希望者を東京女子大学にふりむけ、五年制の高等女学校となった（『まことの人の輝きを』、88－89）。

ミス・ホルセーが院長を辞任した1921（大正10）年、後任にA・K・ライシャワーが就任する。ライシャワーは『日本における仏教の研究』によって学位を得た日本の文化に精通した神学者であり、明治学院で教鞭をとり、また東京女子大学、日本聾啞学校の設立に尽力した。夫人のミセス・ライシャワーは女子学院で教鞭をとっているという縁もあり、震災の時には真っ先に駆けつけ援助を行ったが、院長としての通常業務は専ら三谷学監が行っていた。ちなみにA・K・ライシャワーは第二次大戦後も国際基督教大学の設立に尽力し、A六番女学校開設（1870年）から数えた女子学院創立九十一周年記念式典に当時駐日大使であったエドウィン・ライシャワーとともに来校、講演を行っている（『まことの人の輝きを』、104）。

この年の『同窓誌』（大正一〇年度）はツルー氏記念の特集を組んでいる。本学の創立者ドーラ・スクーンメイカーの伝記的背景との比較の材ともなるツルー夫人の生い立ちと日本に来た経緯を知るため、その記事の冒頭におかれた一人の卒業生（1889年櫻井女学校卒）の回想の前半部を紹介したい。

女子学院の母ツルー夫人

女子学院の大講堂に集まる幾多の学生女子はその大講堂を飾るツルー夫人の肖像によって夫人の気高い人格を偲ぶことができると思う。ツルー夫人は、実に気高い人格の所有者であった。（……）

ツルー夫人は、今を距る八十二年前、一八四〇年十二月七日、北米合衆国の一小村に生まれたる清教徒の血をうけた婦人であった。夫人は五人の兄弟姉妹の

中の最小妹であって、熱心なる基督教徒であった。父母の家庭に、最も平和に、最も幸福に育てられた夫人は長ずるにおよびその信仰は更に堅きを加え、献身的の一生を送ることは、彼女の祈りであった。かくて夫人は、ウィリアム大学に学べる一青年ツルー氏と婚約七年の後、同氏がオーボン神学校を卒業されると同時に、結婚された。新婚早々一小村の牧師として赴任せられ、夫人は専心夫を助けて教会の事業に尽くされた。しかし、神の摂理は長き生命をツルー氏に与えたまわず、氏は七年の奮闘の結果、勇士が戦場で仆れたる如く、ある安息日に例の如く説教中壇上で仆れ、幾何もなくこの世を去られた。ツルー氏存命中、外国伝道に志が厚かったので、夫人は夫の遺志をつぎ、外国伝道に一身を献せんと決心された。夫人の親友は極力反対した。当時の外国伝道は非常に困難であり、かつ危険も伴ったからである。その上夫人の如き人格高き婦人は本国に於いても有要な人物であったから手放すのを惜しんだのも無理ではなかった。しかし夫人の意思は鉄の如く堅く遂に明治七年米国長老教会外国伝道局より派遣せられ、始めて日本の土をふまれた。(……) (田村えい、九十歳時の口述筆記「ミセス・ツルーの思い出」、『女子学院の歴史』589頁に掲載)

ここに描かれているミセス・ツルーの姿、「神の善意を体現するために遠い日本にやってきて日本人女性の地位の向上に貢献した」(小倉、312) 外国人婦人宣教師の姿には、明治期の日本で布教され、紆余曲折を経ながらも日本社会に受容されていったキリスト教の縮図があるように思われる。まずプロテスタントが日本の有力者層に受容されたのは、勤勉と正直を美德とする善き家庭(=国家)の理想をもつ、プロテスタント独特の「健全さ」が理由である。中でもA六番女学校を創立したミス・カロゾルスをはじめとする女子学院の歴史にかかわった宣教師たちが属していた長老派は「簡素、清楚、質素」を旨としている。キリスト教には宗派によって信者の属する社会階級がほぼ決まっているという現象がみられるが、長老派は弁護士・医師・大学教授などの知的職業につく者が多く、また職業的使命を幼児期から身につける(つけさせられる)傾向があるといわれる。文学上の例を挙げれば、カナダ人作家の代表作『赤毛のアン』において主人公の孤児アンが教師を志すのは、養父マッシュウの家が「長老派」であったことと関係があると考えられている(小倉、311)。この場合、勤勉さが学校の勉強における勤勉さ、ひいては勉学における優秀さに表象されるというわけである。

したがって、明治期の日本の社会に外国人宣教師の英学・女学が浸透していった理由の一つは、長老派教会が教える美德の概念が他の宗派のものよりも日本人になじみやすかったからと考えられる。そしてキリスト教主義の女学校が輩出する卒業生たちは西洋風に近代化された良妻賢母となって、そのような妻を志向する有力者階層もしくは有産階級の男性と結婚し、先に紹介したインブリー宣教師の講演にあったように「殆ど例外なく、彼女らは学校との連絡をとり続け、今度はその娘たちを女子学院に送」ったのである。インブ

リーの、卒業生の非常に多くの者が妻となり母となってもクリスチャンとして生活をし、教会の内外でキリスト教のために大きな力となっている、という指摘からは、開国後の明治期日本という限定された時代に起きた特異な現象が見えてくる。すなわち、女生徒にキリスト教教育を施せば効率よく有力者階層内にキリスト教徒を生みだせるという布教者側の思惑が、前近代的な不平等のくびきから女性を解放してくれるような非日本的な道徳に熱狂し心酔したい、ただし日本人の持つ美徳も完全には否定されたくない、という当時の日本の女性たちの精神的渴望を触媒として具体化した現象である。その瞬間の積み重ねが、女子学院というユニークな女子高等教育機関になったといえるだろう。

おわりに

時代はさらに大きく動き、教育を受けた結果、女性のみならず社会的弱者の存在全般に人々が覚醒した大正デモクラシーの時代から、戦争とファシズムがのさばる昭和へと移ってゆく。1925（大正14）年6月には前院長矢嶋楯子が九十四歳の天寿を全うした。青山会館で盛大な葬儀が行われ、教職員生徒一同が会葬し哀悼の意を表した。矢嶋の逝去にともない相続人から東京府に対して三谷民子を学校継承者とする「設立者変更認可願」が提出され、受理された（『目で見える女子学院の歴史』、48）。一方学監の三谷は病気のため転地療養をしていたが、院長ライシャワーは学院の慈父として万人の信頼を得ていた。大正中期に着任してきた優秀な新任教師たちがベテラン教師を支える態勢をとりつつあり、次の三谷院長時代を迎える準備をしている。それは国全体が戦時体制に突入してゆく中で、キリスト教主義学校としての信念が幾度も試される試練の時代である。盧溝橋事件から始まった宣戦布告のない戦争が大陸にひろがり、国内も非常時体制に入った1938（昭和13）年の女子学院の標語は、「善をなすに倦まざれ／もし倦まずば時にいたりて刈り取るべし。」であった。だがこのあとの女子学院は対英米の戦争に深い悲しみを抱きつつ、やむなく戦時教育体制に協力する。ミッション・スクール出身の女性がキリスト教が示してくれた道徳的な社会活動に献身する、するとそれが家庭に、ひいては国家に貢献する、という幸福な循環はその後再び復活することはなかった。

参考文献

『女子学院五十年史及学窓回想録』、女子学院同窓会、1928年。

『女子学院の歴史』、学校法人女子学院、1985年。

『目で見える女子学院の歴史』、学校法人女子学院、1992年。

川西薫他 編著『まことの人の輝きを 同窓生が辿る女子学院と同窓会の歩み』、女子学院同窓会、2007年。

『50年の歩み』 青山学院女子短期大学、2000年。

『キリスト教と文化 総合文化研究所シリーズ1』、青山学院女子短期大学総合文化研究所、

2007年。

小倉千加子、『赤毛のアンの秘密』、岩波書店、2014年。

Early History of Joshi-Gakuin: An Attempt to Emerge Women's Education and Christianity in the Meiji Era

Mihoko YAMADA-ISHIDA

In this article, the author tries to recapture the early history of Joshi-Gakuin, a mission school for girls in Tokyo, which was founded by American female Presbyterian missionaries in the Meiji era.

Through the narratives of foreign missionaries and Japanese alumnae of mission schools, the author tries to demonstrate the historically crucial moments when Christianity caused a vital change in the education for young Japanese girls. First it served to deconstruct the women-oppressing patriarchal system which persisted in Meiji-era Japan and give girls the equal opportunity for education. Yet the mission schools gradually conformed to the policies of both the Mission board and the Meiji government to reproduce modernized, intelligent housewives who voluntarily became efficient subjects.

Keywords : Japan in the Meiji era, Mission school discipline, Presbyterian missionary board, advanced education for women, Joshi-Gakuin
